

## 巻頭のことば

一三年次を迎えた「かぬま詩草二〇一八」が発行できました。鹿沼地域・周辺に於いて詩を愛好し、文学的思考・コトバへの感性にこだわり、天与とも言うべき生きる意味を問い求め続け、詩情を表現しようとする方々に敬意を表します。立ち枯れて行きそうな近未来ですが、息の続く限り、私たちは永遠の今、次の世代への責任と希望への意味をコトバに見出していききたいものです。

おぞましいポピュリズム政治の低劣な言葉が、アメリカの方からしぶいてきたり、これが人間の言葉なのか、ぞっとするような劣化した言葉が、日本の社会の中でも吹き荒れ始めています。人間の弱さ、社会の劣化そのものです。

今求められているのは、コトバの伝導者・教育者、自分の言葉に責任を持つ詩のあることばです。たとえ、表現の自由が保障されているにしても、それを発し受け止める自分と他者である聴き手・読者に対して、倫理的責任を負わねばならないはずです。詩人や、芸術家にも特権はありません。

昨年は、前文部科学事務次官の前川喜平氏が、職を辞する際に後輩に伝えたことばが光っていました。

「組織の論理に従って公務を行っていても、君たちが個人として国民に負うべき責任は常に存在する。君たちは公務員である前に尊厳ある個人であり、主権者たる国民だ。人を生かし、自分を生かし、その職に生きる精神覚悟をもって、みんなが生き生きと働く職場を作っていただく下さい。」

全体の奉仕者であり、権力の下僕でないという公務員の誇りも響いてきます。

「世界がぜんたい幸福にならないうちは、個人の幸福はあり得ない」と云った詩人・宮沢賢治のことばに通底しています。

自らの職とことばに生きる意味をみていた人、国の文教行政を担った今日の一人の教育者、詩人がいたと言うことは救いであり喜びです。

二〇一八年 二月四日 (立春)

編集発行 鹿沼詩友会 (鹿沼市文化協会加盟) 小林守城